

産物書上帳記載の魚名を基にした近世農民の魚種識別知識 の検討

誌名	農村計画学会誌 = Journal of Rural Planning Association
ISSN	09129731
著者	守山, 拓弥 守山, 弘
巻/号	34巻4号
掲載ページ	p. 453-460
発行年月	2016年3月

産物書上帳記載の魚名を基にした近世農民の魚種識別知識の検討

Evaluation of the Fish Identification Knowledge Possessed by the Farmers of the Edo Age using the Fish Names Reported in the “Sanbutsu-kakiagecho”

守山 拓弥* 守山 弘**

Takumi MORIYAMA*, Hiroshi MORIYAMA**

(*宇都宮大学農学部 **農業環境技術研究所名誉研究員)

(*Faculty of Agriculture Utsunomiya University, **Honorary Fellow of National Institute of Agro-Environmental Sciences)

I はじめに

わが国の水田生態系は近世には豊かな状態で維持されていた。それは江戸期から明治初期にかけての江戸・東京で、カワウソ、トキ、コウノトリなどの生息が報告されている¹⁾²⁾ことから想像できる。岩崎¹⁾は、カワウソは綾瀬に、トキは千住に、コウノトリは葛西に生息していると記している。これらの地は江戸末期には水田地帯であったことが迅速測図から明らかにされている³⁾。このことから水田という水空間利用は、近世においては豊かな生態系を維持していたといえることができる。

いっぽう、森⁴⁾は生産基盤の近代化が水田生態系に影響を与えたことを指摘している。特に水田水域に生息する魚類については、圃場整備事業が生息に影響を及ぼしていることが指摘され⁵⁾⁶⁾⁷⁾、保全の必要性が指摘されている⁸⁾。生態系の保全や復元には、対象地域における過去の生態系の情報が有用となる⁹⁾。

過去の生物に関する情報として、わが国には丹羽正伯の発案によって行われた全国規模の生物相調査がある。調査は享保20年(1735年)から行われた。丹羽正伯は、『庶物類纂』の編集を徳川吉宗に命ぜられた際に、編集に必要となる調査として全国の諸藩、天領、寺社領から産物帳を提出させた。いっぽう、諸藩、天領、寺社領でも、産物帳の作成にあたり、領内の各村落に産物帳の基となる書上帳(以下、書上帳という)を提出させたと言われる¹⁰⁾。安田はこの史料の重要性に気づき、盛永とともに全国に残されていた産物帳や書上帳の控を集め、『享保・元文諸国産物帳集成』として刊行した¹⁰⁾。そのなかには栃木県に残されていた史料が5点(表1の史料1~5)収録されている。このように、書上帳がまとまって見つかっている地域は他に類を見ない。書上帳を基に、当時の魚類相を明らかにすることができれば、水田生態系の保全のための重要な知見となる。

いっぽうで、書上帳の作成時期は、西欧諸国においても生物分類の体系化がようやく進み始め、分類学の蓄積は十分では無かったことが想定された時期である。動物命名法の出発点となったカール・フォン・リンネの著書「Systema Naturae」第10版は1758年に出版されている¹⁴⁾。また、書上帳の調査者は姓もないことから農民であり、本草学者や医師などの専門家の関与は無かったと考えられる。そのため、書上帳に記載された魚名(以下、史料記載名という)は分類学的にみて妥当な識別がなされ、記述されたものか定かでない。

以上のことから、書上帳を基に当時の魚類相を明らかにすることを考えた場合には、史料の該当村落における享保年間の農民(以下、近世農民という)が持つ魚類識別の知識について、産物書上帳記載の魚名を基に検討する必要があると考えた。そしてこの課題を本研究の目的とした。

II 研究の方法

1 研究の対象地域

研究の対象は、書上帳の記録が多く残る栃木県中部の鬼怒川、思川水系とした(図1)。

2 栃木県に現存する産物帳関連の史料の確認

本研究を進めるにあたって栃木県内に残されている書上帳を調査及び整理した。ここでは、栃木県立文書館に所蔵されている史料に該当するものがないか、同館のデータベースを用いて調べた。

3 史料記載名と分類学的な種・分類群の対応関係

史料記載名と現在の分類学的な種もしくは分類群の対応関係を調べた。史料記載名と標準和名とが同じ、もしくはほぼ同じであれば、対応関係があると推定した。ま

た、史料記載名と標準和名が対応していない場合は、栃木県や近県における地方名を基に史料記載名と種もしくは分類群との対応関係を推定した。

4 史料記載名と現在の魚類相との比較検討

史料記載名を基に作成した種・分類群名のリストと、現在の魚類相との比較を行った。これは、第一に近世農民は、対象地域の魚類相のうち、どの程度の種・分類群を識別していたか、について調べるためである。第二に、種レベルで明らかとならなかった史料記載名について、そこに含まれる可能性のある種を推定するためである。第三に、書上帳に記載されていない魚種について、特徴や共通点について考察するためである。

比較対象として、平成6年から同11年にかけて実施された栃木県自然環境基礎調査で把握された魚類相のうち、鬼怒川水系および思川水系の魚種のリストを用いた¹⁵⁾。

5 近世農民が持つ魚類識別知識についての検討

はじめに、史料記載名のうち、種レベルまで識別されているものの割合を調べた。続いて、栃木県（2001）に記された対象地域の魚類相¹⁵⁾のうち、種レベルで識別されているものの割合を調べた。魚類相との比較を行ったのは、対象地域に生息する魚類相のうち、近世農民が種レベルで魚種を識別していた割合を把握するためである。ただし、当時の魚類相は不明であり、便宜的に栃木県（2001）に記された対象地域の魚類相¹⁵⁾を用いたことから、明らかとなった割合は参考情報とした。さらに、種レベルまで識別されなかったものについて、その理由を考察した。

III 栃木県に現存する産物帳関連の史料の確認

本研究を進めるにあたって未発表の史料が存在するかどうかを調査した。その結果、盛永ら（1985）¹³⁾および河内町教育委員会（1982）¹⁶⁾がこれまでに解説し公表している史料（表1の史料1～5）に加え、栃木県立公文書館に3点の史料（表1の史料6～8）が保管されていることが明らかになった。このうち史料6は栃木県立文書館の企画展¹⁷⁾で紹介されていたが、それ以外は未発表であった。

栃木県中央部の各村落における享保年間の農民が持つ分類学的知識について検討するため、魚類の記載が多い史料2, 3, 6を使用した（表1）。史料2が対象とする岡本最寄拾叁ヶ村（11村）は、現在は栃木県宇都宮市に属し、市の東部を流れる鬼怒川に面した中間地農村で

表1 栃木県内に残された産物書上帳一覧

Table 1 List of the historical materials “Sanbutsu-kakiagecho” kept in Tochigi Prefecture

No.	史料名	作成年
1	下野国宇都宮領高谷林新田村産物書上帳	1735
2	下野国宇都宮領岡本最寄拾叁ヶ村産物書上帳	1736
3	（下野国河内郡羽牛田最寄拾叁ヶ村産物書上帳）（欠題）	1736
4	下野国芳賀郡竹原村（産物書上帳）	1735
5	丹羽正伯様より被仰出候品々書上帳（下野国芳賀郡飯貝村産物書上帳）	1735
6	下野国宇都宮領産物書上帳 塩谷郡佐貫村	1736
7	下野国宇都宮領産物相改書上帳 風見山田村	1736
8	産物書上帳 舟生村観音寺	1736

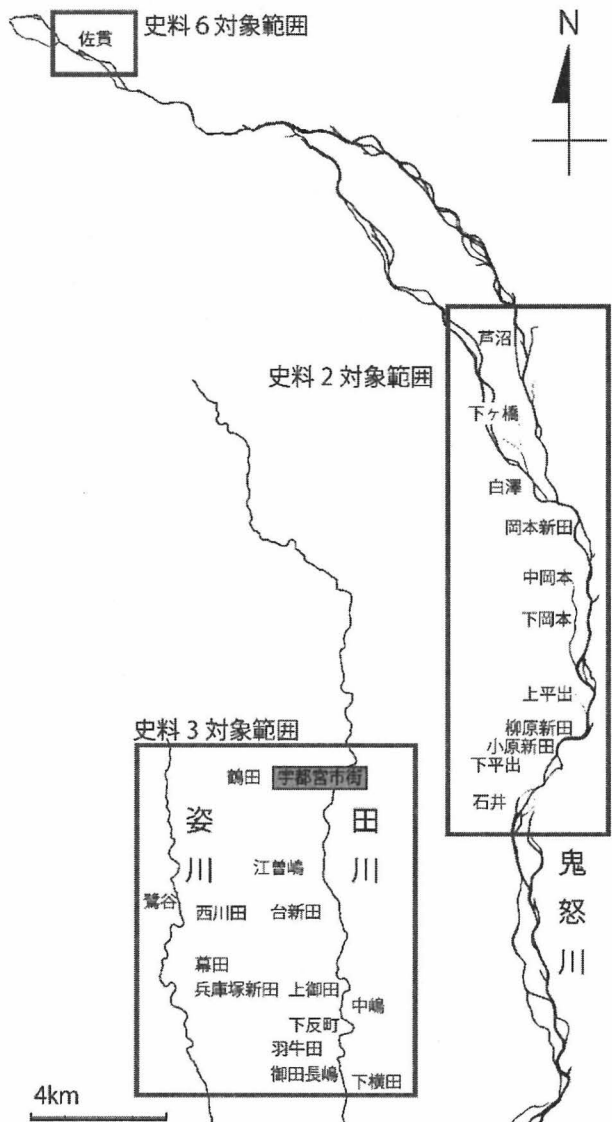


図1 各史料の対象範囲

Fig. 1 Target area of the historical materials “Sanbutsu-kakiagecho”

ある。また、史料3が対象とする下野国河内郡羽牛田最寄拾叁ヶ村（13村）は、中間地農村で、宇都宮市の南部に位置している。史料6が対象とする佐貫村も鬼怒川に面した村である。ただしこの地区は史料2の地区より

さらに上流にある中山間農村で、鬼怒川扇状地の扇端に位置する。なお、図1は「宇都宮近傍圖（5万分1；明治25年測図）」と「旧版地図：矢板（5万分1；明治42年測図）」を基に作成した。

IV 史料記載名と種・分類群の対応関係の推定

史料に書かれた魚名は、田中（1941）、洪澤（1958、1959）、高木（1970）、辛川・柴田（1980）、尾田（1989）、能勢（1989）、鈴野（2000、2001）、川那部（2001）、中井（2005）、栃木県なかがわ水遊園（2010）を参考にし、種および分類群を推定し、必要に応じて便宜的な区分を設けた^{18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 28) 29)}。結果一覧を表2に、推定の理由を以下にそれぞれ示す。

1 推定された魚類

①種レベルで識別された魚類

史料記載名：うなぎ

標準和名：ウナギ

標準和名と同じため、ウナギと推定できる。

史料記載名：いかりたなご

標準和名：オイカワ

栃木県内におけるオイカワの地方名として、「イカリ」^{19) 29)}、「タナゴ」²⁹⁾がある。さらに「イカリ」というオイカワの地方名は水戸でも用いられ^{18) 19) 21)}、北関東で用いられる地方名と考えられる。したがって、「いかりたなご」は、栃木県内におけるオイカワの地方名として報告されている「イカリ」と「タナゴ」の両者を含むことからオイカワと推定できる。

史料記載名：かまづか、かまつか

標準和名：カマツカ

標準和名と同じか、ほぼ同じ名称のため、カマツカと推定できる。

史料記載名：さい

標準和名：ニゴイ

栃木県では「さい」はニゴイをさすことから^{18) 19) 21) 29)}、ニゴイと推定できる。

史料記載名：どぜう、どぢやう、とうちやう

標準和名：ドジョウ

標準和名と同じか、ほぼ同じ名称のため、ドジョウと推定できる。

史料記載名：砂むぐり、すなむぐり、すなはみ

標準和名：シマドジョウ

「スナハギ、スナハビ、スナモグリ」というシマドジョウの県内の呼称^{19) 21) 22) 29)}からシマドジョウと推定できる。

史料記載名：ばばこ

標準和名：ホトケドジョウ

「ババスコ、ババスッコ、ババッコ」というホトケドジョウの県内の呼称からホトケドジョウと推定できる²⁹⁾。

史料記載名：ぎぎう、きぎう、ぎんぎう

標準和名：ギバチ

「ギンギョ、ギンバチ、ギギョ」というギバチの県内の呼称²⁹⁾、「ギギユウ、ギギョオ」という隣県の群馬県での呼称¹⁸⁾からギバチと推定できる。なお、史料記載名がギギ (*Pseudobagrus nudiceps*) と類似しているが、ギギの自然分布は中部地方以西となるため除外できる。

史料記載名：なまず、なまづ

標準和名：ナマズ

標準和名と同じか、ほぼ同じ名称のため、ナマズと推定できる。

史料記載名：あゆ

標準和名：アユ

標準和名と同じため、アユと推定できる。

史料記載名：さけ、かわさけ

標準和名：サケ

標準和名と同じか、ほぼ同じ名称のため、サケと推定できる。

史料記載名：やまべ

標準和名：ヤマメ

栃木県で「やまべ」がさす魚種として、オイカワとヤマメがある^{21) 29)}。しかし、「やまべ」、「いかりたなご」の史料記載名は両者とも史料2にのみ記述され、他の史料にはない。後者はオイカワと推定されたため、「やまべ」はヤマメを指す名称と推定できる。

中井（2005）は、「やまめ」の語源は「やまはえ」であり、「やま（山）+はえ」→「やまばえ」→「やまべ」→「やまめ」となったと説明している²⁶⁾。これに従えば、栃木県でのヤマメの呼称も「やまめ」より前の時代に「やまべ」が用いられていた可能性がある。

史料記載名：ゆわな

標準和名：イワナ

鈴野（2000）によれば、東北から関東地方の広い範囲で、イワナの音韻転訛として「ゆわな」という名前が確認されている²⁴⁾。以上から、イワナと推定できる。

史料記載名：うそぼっこ

標準和名：メダカ

河内町教育委員会（1982）では「うすぼっこ」と解説している¹⁶⁾。辛川・柴田（1980）、尾田（1989）によれば、栃木県におけるメダカの方言として「うすぼっこ」が

あることからメダカと推定できる^{22) 23)}。

史料記載名：ほら

標準和名：ボラ

標準和名と同じため、ボラとした。なお、ボラは通常汽水域や海水域で生息するが、純淡水域まで遡上することが知られ²⁷⁾、栃木県内でも生息が確認されている¹⁵⁾。江戸期の鬼怒川は、舟運が盛んであったことから、魚類の遡上を妨げる構造物はあまりなかったと考えられ、記述のある鬼怒川中流域まで遡上が可能であったのではないかと推定できる。

②分類学的な分類群で推定された魚類

史料記載名：川やつめ、屋つ

標準和名：ヤツメウナギ属

栃木県では、「ヤツメ」はスナヤツメをさすことから^{21) 29)}、スナヤツメと推定できる。いっぽう、「川や

つめ」という史料記載名から、カワヤツメ (*Lethenteron japonicum*) である可能性も排除されない。栃木県〈2001〉の調査では、カワヤツメは確認されていない¹⁵⁾。また、カワヤツメは日本全国で広く「ヤツメ、ヤツメウナギ」と呼ばれているが^{18) 27)}、栃木県の記録はない^{18) 19) 21) 29)}。しかし、可能性という点ではカワヤツメが江戸期に鬼怒川水系および思川水系に生息していたことも否定されない。したがって、「川やつめ、屋つ」は主にスナヤツメを指すと考えられるが、スナヤツメとカワヤツメの両種を含めるため、ヤツメウナギ属とした。

史料記載名：ます

標準和名：サケ科

「マス」は、降海した後に遡上したサケ類を指すが、栃木県 (2001) によれば、対象地域で降海する大型の

表2 書上帳記載の魚類名とその標準和名、現生種との関係一覧

Table 2 List of the Identified Fishes written in the Kakiagecho and respective relations to the present fauna

整理No.	史料記載名			推定された魚名		栃木県(2001)の掲載種 ^{註1)} との対応関係	
	史料2	史料3	史料6	標準和名・分類群名・ 学名	学名		
推定された魚類							
種レベルで推定された魚類							
1	うなぎ	うなぎ	うなぎ	ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>	ウナギ	
2	いかりたなご			オイカワ	<i>Zacco platypus</i>	オイカワ	
3	かまづか	かまづか	かまづか	カマツカ	<i>Pseudogobio esocinus esocinus</i>	カマツカ	
4	さい	さい		ニゴイ	<i>Hemibarbus barbus</i>	ニゴイ	
5	どぜう	どちやう	どちやう	ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i>	ドジョウ	
6	砂むぐり	すなむぐり	すなはみ	シマドジョウ	<i>Cobitis biwae</i>	シマドジョウ	
7			ばばこ	ホトケドジョウ	<i>Lefua echigonia</i>	ホトケドジョウ	
8	ぎぎょう	きぎょう	ぎんぎょう	ギバチ	<i>Pseudobagrus tokiensis</i>	ギバチ	
9	なます	なまづ		ナマズ	<i>Silurus asotus</i>	ナマズ	
10	あゆ	あゆ	あゆ	アユ	<i>Plecoglossus altivelis altivelis</i>	アユ	
11	さけ		かわさけ	サケ	<i>Oncorhynchus keta</i>	サケ	
12	やまべ			ヤマメ	<i>Oncorhynchus masou masou</i>	ヤマメ	
13			ゆわな	イワナ	<i>Salvelinus leucomaenis</i>	イワナ	
14	うそぼつこ			メダカ	<i>Oryzias latipes</i>	メダカ	
15	ぼら			ボラ	<i>Mugil cephalus cephalus</i>	ボラ	
分類学的な分類群で推定された魚類							
16	川やつめ		屋つ	ヤツメウナギ属	<i>Lethenteron</i> sp.	スナヤツメ	
17	ます		ます	サケ科	Salmonidae	ヤマメ(サクラマス)	
18	ふな	ふな	□な ^{註2)}	フナ属	<i>Carassius</i> sp.	キンブナ, ギンブナ	
19	たなご	たなご	たなご	タナゴ亜科	Acheilognathinae		
20	にがふな			タナゴ亜科	Acheilognathinae		
21			やぶかちか	ハゼ科	Gobiidae	ウキゴリ類, ジュズカケハゼ, ヨシノボリ類	
分類学的ではない枠組み(型と標記)で推定された魚類							
22	ざこ(まるた)	小ざっこ	ざこ	ザコ・ハヤ型	-	ウグイ, アブラハヤ, モツゴ,	
23		はや		ザコ・ハヤ型	-	メダカ	
24	かちか	かじか	かじか	カジカ・ハゼ型	-	カジカ, ウキゴリ類, ジュズカケハゼ, ヨシノボリ類	
推定されなかった魚類							
25		ぎんなぎ	(不明)		-	-	
史料記載名との対応がみられなかった栃木県(2001)の確認種							
種・分類群・史料記載名数						種(15), 分類群(5), 型(2), 不明(1)	27
標準和名, 学名およびその掲載順は栃木県(2001)に, 分類群名は川那部(2001)によった。							
註1) 栃木県(2001)に掲載されている魚種のうち, 国外外来種(タイリクバラタナゴ, ソウギョ, ニジマス, ブラウントラウト, カワマス, レイクトラウト, オオクチバス, コクチバス, カムルチー)および国内移入種(バス, カワムツ, ムギツク, スゴモロコ, ヒメマス, ホンマス, ワカサギ), 在来か外来かが不明な種(タモロコ)は除外した。また, フナ類はキンブナ, ギンブナの記載と, トウシノボリはヨシノボリ類の記載と重複するため除外した。							
註2) □は史料の欠損部分を示す。							

サケ類はサクラマス（ヤマメ）かサケとなる¹⁵⁾。サケは別に記載があることから、サクラマスと推定した。しかし、当時イワナ（史料記載名：ゆわな）の降海型やその他のサケ科魚類が生息していなかったかは不明であることからサケ科とした。

史料記載名：ふな、□な

分類群名：フナ属

「ふな」という記述のみであるため、種レベルでの識別はなされていなかったと可能性がある。そのため、フナ属として推定できる。なお、□標記部分は史料の欠損を示すが、2文字かつ語尾が「な」となることから「ふな」と解釈した。

史料記載名：たなご、にがふな

分類群名：タナゴ亜科

「にがふな」は高木（1970）によれば、ヤリタナゴ、タナゴ、ゼニタナゴを指す地方名とされる²¹⁾。したがって、「たなご」、「にがふな」をタナゴ亜科として推定できる。なお、史料2では「たなご」と「にがふな」がともに記述されていたことから、複数種のタナゴ亜科が生息していて、かつそれらを2種に区分して識別していたことがうかがえる。

史料記載名：やぶかぢか

分類群名：ハゼ科

「やぶかぢか」という地方名は報告されていないが、県内ではヨシノボリ類を「カヤカジカ、ヘビカジカ」、ヌマチチブを「ブタカジカ」、ウキゴリを「スイツキカジカ、ヘビカジカ」と呼ぶことが報告されている²⁹⁾。カジカは主に河床の石の下で生息するのに対し、ヨシノボリ類を始めとするハゼ科の魚類は河岸の植生内にも生息する。「カヤカジカ」というヨシノボリ類の地方名はこうした生態を反映したものと考えられる。さらに、史料6には「かじか」と「やぶかぢか」が併記してあるため、「かじか」に含まれる主な種と推定される「カジカ」ではないと考えられた。そこで、植生内に生息しているカジカに似た魚類を示すと考えられる「やぶかぢか」はハゼ科の一種、もしくはハゼ科の複数種の名称と推定できる。

③分類学的でない枠組みで推定された魚類

史料記載名：ざこ（まるた）、小ざっこ、ざこ、はや

分類型名：ザコ・ハヤ型

「ざこ」および「ざっこ」は県内ではウグイのことをさす^{21) 29)}。したがって、史料に書かれた「ざこ」にはウグイが含まれていると考えられる。また、史料2では「ざこ・是は大きく罷成り申候はまるたと申候」とある。「まるた」はマルタ (*Tribolodon brandtii*) を指す可能性があり、さらに、栃木県の地方名で「ザコ」

を名称に含む魚類にはウグイ以外にもアブラザコ（アブラハヤ）が、「ハヤ」を名称に含む魚類にはヤナギハヤ（モツゴ）が知られる²⁹⁾。そこで、ここでは「ざこ」と「はや」をウグイ以外に多種の魚類を含む「ザコ・ハヤ型」という区分とした。

史料記載名：かぢか、かじか

分類型名：カジカ・ハゼ型

標準和名と同じため、カジカ (*Cottus pollux*) が主な対応種と推定できる。いっぽう、渋澤（1959）は、地方名としての「カジカ」にはハゼ科を含むことを指摘している²⁰⁾。栃木県内でも、オオヨシノボリ (*Rhinogobius fluviatilis*)、カワヨシノボリ (*R. flumineus*)、トウヨシノボリ (*R. kurodai*) の地方名に「カジカ」があることから²⁹⁾、ハゼ科も含まれている可能性がある。そこで、カジカとハゼ科を合わせ、カジカ・ハゼ型という区分とした。

2 推定されなかった魚類

史料記載名：ぎんなぎ

該当する地方名がなく、推定できなかった。

V 書上帳に掲載されている種・分類群と現在の魚類相との比較検討

1 種レベルまで識別されていると推定された種

史料記載名のうち、種レベルまで識別されていると推定されたのは15種であった。この15種は、現在の鬼怒川水系および思川水系に生息する魚類相¹⁵⁾に含まれている種であった。

2 史料記載名のみで見られる種

たなご、にがふな、は前述の通り、タナゴ亜科と推定できたが、栃木県（2010）では¹⁵⁾、鬼怒川水系および思川水系で確認されていない。本研究では、たなご、にがふなに該当する種はわからなかったが、現在生息が確認されていないタナゴ亜科が享保年間に生息していたことが分かったことは、本研究のひとつの成果といえよう。

3 史料記載名にはない種

①分類群や型に含まれる可能性がある種

栃木県（2001）では確認されているが、史料記載名にはない魚種として、キンブナ (*Carassius auratus* subsp.2), ギンブナ (*Carassius auratus langsdorffii*)、アブラハヤ (*Phoxinus lagowskii steindackeri*)、モツゴ (*Pseudorasbora parva*)、ウキゴリ類 (*Chaenogobius* sp.)、ジュズカケハゼ (*Chaenogobius laevis*)、ヨシノボ

り類(*R. sp.*), コイ(*Cyprinus carpio*), イトヨ(*Gasterosteus* spp.)がある¹⁵⁾。

このうち、キンブナ、ギンブナは、史料記載名のうち「ふな」に含まれる可能性が高い。両種の識別は背鰭の鰭条数や鰓は数などを調べる必要があり、享保年間には両種は別個に識別されていなかった可能性がある。

アブラハヤ、モツゴについては、アブラハヤには「アブラザコ、アブラツバヤ、ニガザコ、ニガツバヤ、ニガハヤ、ニガバヤ」、モツゴには「ヤナギハヤ」という栃木県内の地方名があることから²⁹⁾、ザコ・ハヤ型に含まれていると推定した。さらに、メダカもザコ、ザゴという栃木県内の地方名があることからザコ・ハヤ型に含まれている可能性がある。

ザコ・ハヤ型が「ざこ」「小ざっこ」という複数種を含んだ区分となった理由には、食文化の影響が考えられる。これらの多くは類似の場所で生活するため、漁獲の際には区別されることがなく、また調理法も共通するので、細分化する必要がないためと考えられる。

ウキゴリ類には「スイツキカジカ、ヘビカジカ」が、ヨシノボリ類には「カジカ」が栃木県内の地方名としてあることから²⁹⁾、両分類群は「やぶかぢか」か「かじか」に含まれると考えられる。ジュズカケハゼも、群馬県内の地方名として「カジカ」があるので、「やぶかぢか」か「かじか」に含まれると考えられる。こうしたカジカやハゼ科の魚類は、底生魚で、頭部が大きくずんぐりとした体形であることなどの類似点から、分類学的な識別がなされていなかった可能性がある。

②生息していなかったか生息数がわずかであったと推定される種

コイとイトヨは栃木県内に残された書上帳に記載されていなかった種である。コイは食糧として重要な魚類なので、対象となる村落に生息していたのであれば、記述が漏れることはないと考えられる。例えば、近隣県に残された産物帳では、鬼怒川と利根川の合流点に近接する関宿藩の産物帳「下総国猿嶋下郷式拾三ヶ村産物書覚(1735)」³⁰⁾で魚類の項目の最初に「鯉」がある。また、那珂川中下流域から霞ヶ浦にかけての地域を領有していた水戸藩の産物帳「御領内産物留(1736)」では淡水魚の中で「マス、ムナキ、鮭」に続き4番目に「鯉」が記されている。したがって近世の該当地域には、コイは生息していなかったか、生息していたとしても住民が日常的に接することがない程わずかであったと考えられる。

イトヨは、棘状の鰭を持つその特徴的な姿から、全国各地で様々な地方名がある。例えばハリウオ(石川県)、トゲブナ(埼玉県)などその姿を表現した地方名が多く見られる^{19) 21)}。これは、イトヨを含むトゲウオ類が、そ

の姿から他の種と識別されやすく、かつ名称がつけられやすいためと考えられる。こうしたことから、対象地に享保年間にイトヨが生息していたのであれば、なんらかの名称が記述されていた可能性が高いと考えられる。以上から、書上帳に記述がなく、かつ現在の主な分布域でもないことから、イトヨは生息していなかったか、生息していたとしても住民が日常的に接することがない程わずかであったと考えられる。

VI 近世農民が持つ魚類識別の知識についての検討

史料記載名と標準和名が種レベルで対応したのは15種で、史料に記述されていた25種の史料記載名(表1の整理No.)の約60%を占める。さらに、「ヤツメウナギ属(史料記載名:川やつめ、屋つ)」については主にスナヤツメであった可能性が高く、また「サケ科(史料記載名:ます)」は主にサクラマス(ヤマメ)であった可能性が高い。両者を種ととらえると史料記載名のうち種レベルまで識別されたものは25種の史料記載名のうち17種、約68%となる。以上のように、史料記載名の多くが種レベルで識別されていたことがわかる。

また、表2に示した現在の魚類相27種と比較すると、約55%にあたる15種が種レベルで対応することがわかった。これに、スナヤツメ、キンブナ、ギンブナ、ウグイ、カジカといった、史料記載名に含まれている可能性の高い種も合わせると、現在の魚類相の約74%が書上帳に記されていることとなる。当然当時の魚類相についての正確な情報はないため、この比較は参考情報となるが、書上帳には、当時の魚類相のかなりの割合が記述されていた、つまり当時生息していた魚類の多くを近世農民が認識し、その半数以上を種レベルで認識していたと考えてよいのではなかろうか。

ここから、栃木県中央部の各村落における近世農民は、村落に生息する魚類の多くを認識するとともに、それらを現在の分類学的な識別に準ずるレベルで識別する知識を有していたことが推察される。

いっぽう、ウグイ以外に多種の魚類を含む区分と、カジカとハゼ科を合わせた区分という分類学的以外の区分でも識別もされていたことが明らかとなり、本研究では便宜的に「ザコ・ハヤ型」、「カジカ・ハゼ型」という区分を設けた。分類学的以外の区分が生じた理由の一つとして、漁労や調理方法が関係した可能性が考えられる。加藤ら(1999)は、史料2の対象地周辺で漁労の研究を行い、魚種や時期ごとに分かれた45種類もの漁法があることを明らかにしている³¹⁾。漁労ではそれぞれの種

を識別し、生態を熟知することが漁獲量の増加につながる。また同地域ではそれぞれの魚種に適した調理方法がある³²⁾。したがって、漁労や調理に際し、区分する必要がない場合には、種レベルでの識別はされなかったものと考えられる。

Ⅶ おわりに

諸国産物帳と書上帳が提出されたのは享保年間であり、カール・フォン・リンネが二命名法を確立するより前である。産物書上帳は西欧諸国においても生物分類学の蓄積がほとんど無かった時代に、栃木県中央部において近世農民により書かれた史料である。書上帳には分類学的な種レベルまで識別された魚名が数多く記されていたことから、栃木県中央部における近世農民が、高い魚類の識別知識を持っていたことを伺い知ることができる。

今回、近世における魚類の識別知識について議論することができたのは、1968年に開始された栃木県史編さん事業で発掘された多くの史料のおかげである³³⁾。また、史料の多さを支えた理由のひとつとして、栃木県立図書館や宇都宮大学が史料の収集と整備に努めてきたことが挙げられる。史料の収集や整備は、歴史学や古文書学のみならず、本研究のような生態学分野など、さまざまな分野の研究を支えることとなる。ひいては、研究成果を通じ、地域社会への還元につながると筆者らは考えている。史料の収集、整備、さらには史料の保全や公開が重要であるという認識が社会全体で広く共有されることが望まれる。

謝辞

本研究は科学研究費補助金（若手研究B 25870108）の支援により実施された。ここに深く謝意を表する。

引用文献

- 1) 岩崎常正 (1824): 『武江産物志』(安田 健編, 『江戸後期諸国産物帳集成 第IV巻 (1999)』) 科学書院, 東京, 1-36.
- 2) 岡田泰明・高木綾子 (1999): 明治初期の東京の鳥 C. A. M 'Veau の報告から (安田 健編, 『江戸後期諸国産物帳集成 第IV巻』) 科学書院, 東京, 13-26.
- 3) 野村圭佑 (2002): 『江戸の自然誌』, どうぶつ社, 東京.
- 4) 森淳・水谷正一・高橋順二 (2008): 水田生態系の特徴と変質—水田生態工学の視点から—, 農業農村工学会論文集, 254, 127-137.
- 5) 端憲二 (1985): 農業水路の魚類保護について, 淡水魚, 11, 64-72.
- 6) 端憲二 (1998): 水田灌漑システムの魚類生息への影響と今後の展望, 農業土木学会誌, 66, 143-148.

- 7) 片野修 (1998): 水田・農業水路の魚類群集 (江崎保男・田中哲夫編, 『水辺環境の保全生物群集の視点から—』), 朝倉書店, 東京, (pp.67-79.).
- 8) 斉藤憲治 (1984): 農業用水路の改修工事の影響を少なくするために (私案), 淡水魚, 10, 47-51.
- 9) 日置佳之 (2002): 生態系復元における目標設定の考え方, ランドスケープ研究, 65 (4), 278-281.
- 10) 安田健 (1987): 『江戸諸国産物帳』, 晶文社, 東京.
- 11) 安田健 (1985): 『享保・元文諸国産物帳』 解題, 『享保・元文諸国産物帳 第I巻』, 科学書院, 東京.
- 12) 安田健 (1992): 『享保・元文諸国産物帳』 解題, 『享保・元文諸国産物帳 補遺編I』, 科学書院, 東京.
- 13) 盛永俊太郎・安田健編 (1985): 『享保・元文諸国産物帳集成 第II巻 常陸・下野・武蔵・伊豆七島』, 科学書院, 東京.
- 14) 動物命名法国際審議会 (2000): 『国際命名規約 第4版 日本語版』, 日本動物分類学関連学会連合, 東京.
- 15) 栃木県 (2001): 『とちぎの魚類』, 栃木県林務部自然環境課, 栃木.
- 16) (1982): 『河内町誌』, ぎょうせい, 栃木.
- 17) 栃木県立図書館 (2013): 『古文書にすむ動物たちとの対話—一人と動物のつきあいに見る下野の江戸時代—』, 栃木県立図書館第25回企画展パンフレット.
- 18) 田中茂穂 (1941): 『実用魚介方言図説』, 水産社, 東京.
- 19) 渋澤敬三 (1958): 『日本魚名集覧第一部』, 角川書店, 東京.
- 20) 渋澤敬三 (1959): 『日本魚名の研究』, 角川書店, 東京.
- 21) 高木正人 (1970): 『全日本及び周辺地域に於ける魚の地方名』, 高木正人, 佐賀.
- 22) 辛川十歩・柴田武 (1980): 『メダカ乃方言—5000の変種とその分布』, 未央社, 東京.
- 23) 尾田治徳 (1989): 『メダカの学校—メダカを知ってメダカの友だちに』, 栃木県連合教育会, 栃木.
- 24) 能勢幸雄, 岩井保, 羽生功, 清水誠 (1989): 『魚の事典』, 東京堂出版, 東京.
- 25) 鈴野藤夫 (2000): 『魚名文化圏. イワナ編』, 東京書籍, 東京.
- 26) 鈴野藤夫 (2001): 『魚名文化圏. ヤマメ・アマゴ編』, 東京書籍, 東京.
- 27) 川那部浩哉・水野信彦 (2001): 『山溪カラー名鑑 日本の淡水魚』, 山と溪谷社, 東京.
- 28) 中井精一 (2005): 魚名文化論 (谷内透編, 『魚の科学事典』), 朝倉書店, 東京, pp.557-563.
- 29) 栃木県ながわ水遊園 (2010): 『とちぎの魚図鑑』, 下野新聞社, 栃木.
- 30) 盛永俊太郎・安田健編 (1992): 『享保・元文諸国産物帳集成 第XVII巻 (補遺篇I)』, 常陸・下野・下総・越中・信濃・美濃・尾張』, 科学書院, 東京.
- 31) 加藤潤・中島香子・水谷正一 (1999): 場と主体の変化からみた農村部における魚とりの変遷過程—栃木県西鬼怒川地区を事例として—, 農村計画学会誌, 18 (1), 43-54.
- 32) 『日本の食生活全集 栃木』 編集委員会編 (1988): 『聞き書 栃木の食事』, 農山漁村文化協会, 東京.
- 33) 奥田謙一 (1985): 下野国の産物帳関係史料解題 (盛永俊太郎・安田健編 『享保・元文諸国産物帳集成 第II巻 常陸・下野・武蔵・伊豆七島』), 科学書院, 東京, (pp.898-899).

Summary: In 1730's Japan, One investigation to clarify the local products was carried out, and the final issues were submitted to the government with the name "Sanbutsucho". On the other hand copies of the primal documents reported by farmers were kept in respective districts. We surveyed 3 papers of these historical materials presented from the villages around the Utsunomiya city, and identified the fishes reported by ancient and/or local names. 15 Names were identified to the taxonomical species. These results showed that the farmers of the Edo Age possessed high identification accuracy and taxonomic knowledge to fishes.

キーワード (Keywords): 淡水魚 (Freshwater fish), 栃木県 (Tochigi prefecture), 江戸時代 (Edo Age), 産物帳 (Sanbutsucho), 魚類識別知識 (Fish identification knowlage)

(2014年 8月26日 原稿受理)

(2015年12月24日 採用決定)